

ロアルド・ダールの家族観

— 『魔女がいっぱい』 『マチルダは小さな大天才』 の分析を通して —

220053 岡田 和音

序章

ロアルド・ダール(Roald Dahl, 1916-1990)は20世紀半ばから後半にかけて、短編小説、脚本、児童文学などといった様々な分野で活躍したウェールズ出身の作家である。彼の作品は現在 65 か国語に翻訳され、発行部数は世界で 3 億部に至るといふ人気ぶりで、彼の代表作『チョコレート工場の秘密』を原作とした映画「チャーリーとチョコレート工場」は日本でも高い評価を受け、今もなお親しまれている。このように、世界中で人気を博すロアルド・ダールだが、彼の作品に含まれるブラック・ユーモアは子供からの絶大な人気の一因といわれている。しかし、グロテスクな描写をユーモアと結び付けるこの手法は、出版当初からその過激な表現が理由で度々議論的ともなった。2023 年 BBC は『オ・ヤサシ巨人 BFG』や『チョコレート工場の秘密』に登場する人物の容姿や体重に関する記述が出版社によって削除され、これが論争を巻き起こしたことを報じている(Glynn&Youngs)。このことから、ダールの表現は出版当初だけでなく 21 世紀もなお議論の対象となっているといえる。

この論争を引き起こす原因ともなった作中の登場人物の外見や性格描写、特に女性に関する描写は多くの研究がなされてきた。しかし、ダール作品で疑念を抱く点は語彙の表現だけではない。大人と子供の関係、とりわけ歪な家族関係が目にとまる。例えば『おばけ桃の冒険』に出てくるいじわるな叔母たちと主人公ジェームズの関係や『マチルダは小さな大天才』(Matilda, 1988)に登場するワームウッド家、『チョコレート工場の秘密』に描かれるチャーリー以外の 4 人の子供たちの家庭などが挙げられる。その他にも『オ・ヤサシ巨人 BFG』の主人公ソフィーや『魔女がいっぱい』(The Witches, 1983)のぼくなど、孤児も多く登場する。先述した『おばけ桃の冒険』のジェームズも、もとは両親を亡くした孤児である。

以上のように、ダール作品には決して理想的とはいえない家庭が数多く登場する。本論文はこの「歪な家族の多さ」に対する疑問に端を発しており、ダールの家族観を主題としている。現時点ではダール作品における家族描写に関する直接的な研究は非常に限られており、特に複数作品における詳細分析は限定的である。特定作品においては既に構成や家庭内の関係性などに言及された研究が発表されているものの、多くの場合家族という観点から分析の主軸ではなく補助的な扱いに留まっている。そこで、本研究では時代背景やダール自身の経歴も踏まえつつ『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』の 2 作品に登場する計 5 家族に着目することで、従来とは異なる視点からダールの家族観及び彼の家族描写の意義を明らかにすることを目的とする。

上記 2 作品の選定理由は、両作品及び本稿で参照するダールの自伝『少年』(The Boy, 1984)と『単独飛行』(Going Solo, 1986)の出版時期が近いこと、分析対象となる資料間における家族観のブレが少ないと判断したためである。研究手法は文献調査を主とし、作家分析

と作品分析双方を組み合わせて行う。まず作家分析を通してダールの家族観を考察し、この考察を本稿の仮説として作品分析に反映させながら、『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』の分析を通して理想の家族像を検討していく。また、本稿で扱う家族は『魔女がいっぱい』からは主人公一家（以下「ぼく一家」）とジェンキンス家の2家族、『マチルダは小さな大天才』からはワームウッド家、ミス・ハニー&ミス・トランチブル、ミス・ハニー&マチルダの3家族である。『マチルダは小さな大天才』は作中で家族構成の変化が生じる関係で扱う家族数が『魔女がいっぱい』よりも多くなっているが、ミス・ハニー&マチルダの家庭については第3章のみで論じるため、第2章では各作品2家族ずつ分析することとする。

第1章では、歴史的背景を踏まえた上で、自伝分析を基にダールの家族観を考察する。第1節では産業革命以降の家族に関する社会・価値観変化を概観し、ダールの生きた時代の家族像や家族観を検討する。第2節ではダールの自伝に登場する彼の父・母・祖父母の分析を行い、ダールの家族観形成に影響を与えたと思われる人物との関わりを探る。そして第3節では、第2節の分析結果を基に、本稿の仮説となるダールの家族観を考察する。

第2章では、『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』に登場するキャラクターの分析を行う。第1節では『魔女がいっぱい』に登場する人物を、第2節では『マチルダは小さな大天才』の登場人物を、言動や家族関係を基に分析する。そして、第3節で2作品に登場するキャラクターの関係性を比較し、理想的家族像を検討する。また、作中における理想の家族の傾向と本稿の仮説の関連性を論じる。

第3章では、2作品の構造分析を行う。第2章と同様に第1節で『魔女がいっぱい』を、第2節で『マチルダは小さな大天才』を、家族が作品においてどのような機能を持つのか、またその機能が作品を通してどのように変化しているのかという観点から分析する。そして第3節にて両作品を比較し、機能面から理想的な家族の傾向と仮説との関連性を検討する。また、論文全体の分析を基にダールの描く家族の意義について論じる。本稿では作品分析を登場人物と作品構造の2点に分けて行うことで、より多角的な分析を試みる。

第1章 社会背景と作家の経歴に基づくダールの家族観

本章では、作家の家族観を考察する上で重要な手掛かりとなる、ダールの家族観形成に影響を与えたと思われる要因を、時代背景と作家個人の経験の2点から探り、彼の家族観を考察する。はじめに、作家の経歴に軽く触れた上で、家族変化の歴史や当時の家族観を整理する。続いてダールの自伝を用いて彼の家族を分析し、最後に、第2節を踏まえてダールがどのような家族観を形成した可能性があるのかについて論じる。

第1節 産業革命以降の家族変化と20世紀の家族観

本節では、産業革命以降家族がどのように変化してきたのかを整理する。ここで家族の歴史と当時の家族観を確認することで、ダールの家族観形成に影響を与えたと思われる時代的要因を明らかにしておく。

分析に入る前にまず、著者ロアルド・ダールの経歴を確認する。ダールは1916年に南ウェールズに生まれ、幼少期に父を亡くして以降、母親に女手一つで育てられた。学生時代は教師や上級生による体罰に苦しむも、卒業後は石油会社に就職し、派遣先のアフリカで冒険の日々を満喫している。そして第二次世界大戦で彼は英軍パイロットとして従軍し、この経験を活かして「飛行」をテーマに執筆活動を開始する。作家活動前半は短編小説家として活躍したダールだが、結婚と子育てを経て児童文学作家に転向し、数々の児童文学作品を執筆している。

この経歴からも分かるように、ダールの生きた時代は世界大戦期から世界大戦終結後の転換期にまで至り、これは家庭の在り方が大きく変化した時代とも重なる。家族が変化する大きな要因には価値観の変化が挙げられるのだが、戦争も家族の在り方を考える一つの契機となったといえる。ここからは、より詳細に家族変化の歴史について論じ、当時の家族観を整理していく。

近代のイギリスにおいて、家族が最も大きく変化したきっかけの一つが産業革命である。歴史学者の弓削によれば、もともと産業化以前の家族は農業中心で、家族形態は大家族に限らず様々であったとされている。また夫婦は愛情の上に成立するようなロマンティックなものではなく「労働上のパートナー」であり、愛情や子育てよりも経済活動が重視されるような価値観が主流であった(27-30)。歴史学者のショーターも、数世紀前には人びとは通常愛情ではなく財産やリネージのために結婚したことや、夫婦は仕事の分担や性役割を優先し、感情をできるだけ持たないようにしていたことを主張しているため(56)、弓削の分析にみられる産業革命以前の家族像は一定の妥当性を持つと思われる。

しかし、産業革命を経て、家庭が共同体から切り離されたことで核家族化が進み、また工業化に伴い職業圏と私生活圏が分離したことで、市民層では「男性は稼ぎ手、女性は家庭の守り手」という男女役割が誕生した。歴史学者のミッテラウアーらは、この家族モデル登場の背景には職住の分離、宗教や啓蒙主義の影響下での親子関係の深まり、家庭からの奉公人の切り離し、家族員のみからなる世帯の増加という4つの主要因が存在すると論じてお

り(9)、彼らの主張からは、工業化に伴うライフスタイルの変化だけでなく、当時の思想も家族観に影響を与えていたことが理解できる。宗教や思想が個人・社会の価値観と密接に関わっている以上、これらの思想が家族の在り方に影響を及ぼしたことは避けがたい現象であったといえるだろう。そしてこのモデルは社会に広く浸透することとなり、裕福な家庭だけでなく金銭的にモデルの実現が厳しかったミドル・クラスの下層に属する家庭でも、このモデルを目指す姿勢が見られている(弓削 47)。

一方で、産業革命に伴う大量の労働力の必要性は雇用を拡大し、賃金の安い女性や子供が労働力として駆り出されていたという実情もあった。そのため上記のような家庭における女性像は社会で理想とされていたものの、ワーキング・クラスの実態とは程遠かったといえる。彼らの労働環境は非常に劣悪であり、当時の調査報告書ではその労働環境に関する問題が指摘された(竹内 103)。そのため 18 世紀末から 19 世紀のイギリスでは、上記労働者の環境に目が向けられ、工場法などによって女性や子供の労働条件が定められた。以上を踏まえると、18・19 世紀は家族や性別役割のモデル化と、主に公的空間における女性・児童保護の時代であったといえることができる。

これに対し、20 世紀以降は家族の多様化、私的空間における女性・子供の権利保障の時代となった。世界大戦期に突入したイギリスでは、下層階級に限らず多くの女性が労働市場に参入し、産業革命以降の「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割の矛盾を明らかにすることとなった。ジェンダー研究家の杉村が、「国民」として国家に奉仕に出ることと既存の「女らしさ」を実現することが時に矛盾することを指摘するように(184)、戦時中に上記の性別役割が疑問視されたことは至極真つ当であったと思われる。しかし、戦争が終わると女性は再び家庭での役割を果たすことが推奨された(井上ほか 62)。これに対し、社会参入経験から経済的な自立手段を身に着けた女性たちは反発し、第 2 波フェミニズムを展開するといった抵抗を見せている。また世界大戦後の個人化の進行は、離婚や中絶の権利の保障や、家庭内暴力・虐待の社会問題化、共働きや未婚という選択肢の受容を助長することとなり、20 世紀後半のライフスタイルの多様化を引き起こす一因となった。

以上が産業革命以降のおおまかな家族に関する社会や価値観変化の流れであるが、さらにダールが生きた 20 世紀に絞って家族観を検討しておく。前述した通り世界大戦前のイギリスでは「男は仕事、女は家庭」という価値観が主流であった。そして戦後に女性を家庭に戻そうとする動きがあったことから分かるように、戦後しばらくの間はこの価値観が強く、家父長制や良妻賢母としての女性像が未だ優勢とされていた。そのため女性は既存の家庭に特化した性別役割を抱えたまま、社会を形成する労働者の一部とも見なされるという矛盾を背負う時期であったといえる。しかし 20 世紀は同時に、個人の権利が認められ始め、多様な生き方が受容される時代の先駆けともなっており、性別や家庭、生き方など様々な観点における転換期であった。よってダールの生きた時代の家族観というのは、家父長制や性別役割といった従来の価値観の影響を受けながらも、その状況を脱した新たな理想を模索する、過渡的かつ不確定なものであったと考えられる。

第2節 ダールの家族分析

前節ではダールの家族観に影響を与えたと思われる時代的背景を確認したが、本節ではダール個人の経験から彼の家族観形成に影響を与えたと思われる要因を確認する。具体的には、ダールの自伝『少年』『単独飛行』に描かれている彼の父・母・祖父母を、性格、ダールとの関係性、語りの3点から分析する。自伝には著者の主観が強く反映されるため、本節では人物の性格や行動だけでなく著者との関わりや語りを併せてみることで、その人物が作中でどのように位置づけられているのかについても検討していく。

はじめに、父親であるハラルド・ダールについて分析する。ハラルドは野心をもって地元ノルウェーからフランスに渡り、南ウェールズにて船舶雑貨業で成功した実業家である。彼は14歳の時に左腕を骨折し、医者 of 杜撰な治療の結果片腕生活を余儀なくされた。そしてダールが3歳の時に最愛の娘アストリを亡くし、悲しみの中肺炎を患い亡くなっている。

『少年』で語られるエピソードから読み取れるハラルドの性格の一つは、前向きであるということである。先述したように彼は青年期に片腕を失っているが、本人が「片腕をなくしたからといって不便を感じたことはない」(17)とよく言っていた通り、障害を意に介すことなく前向きな姿勢を見せていた。またハラルドは弟と共に地元ノルウェーを出て、フランスかイギリスで事業を始める計画を立てていたのだが、この計画は無謀であったために彼らの父親に反対されていた。しかし、これに対しふたりは家出をし、貨物船に乗り込んでフランスに渡っている(18)。このことから、ハラルドは親の反対を押し切って夢を追求する信念の強さや行動力、挑戦心を持ち合わせていたことが読み取れる。そして長女を溺愛し、彼女の死に対して大きな喪失感を露わにしている様子からは、深い愛情が伺える。

ダールとの関係性については、惜しくもハラルドが早くに亡くなっているため、二人固有のエピソードは描かれていない。そのため、物語冒頭の父の経歴説明は事実中心の描写が目立ち、以降の場面と比べると、読者には客観的に語られている印象を与えるものとなっている。しかし、語りの随所に著者の感情が見受けられ、例えば『少年』の「必要な家を買う余裕が父にはあった」「ハラルド・ダールもまた堅実なやり方で成功した男だった」(23)という記述からは、ダールが父の経済力を評価している様子が読み取れる。

また、ハラルドが亡くなる際の描写にはダールの感情が特に強く反映されていると考えられ、児童文学者である奥西は、この時のダールの語りのそっけなさから父親に対するいささかの恨みの気持ちを読み取っている(27)。確かに自伝では「... (肺炎) 患者は自らの力で病気と闘わなければならなかった。なのに父は闘う気力をなくしていた。私は今でも断言できるが、父はむしろ最愛の娘のことを思い、天国で早く彼女と会いたがっていたのではないだろうか」(『少年』 27-28)というように語られている。この時のダールの年齢はわずか3歳であるため、当時の彼が父の様子をそのように感じていたのかは定かではないが、「なのに」という表現や「断言できるが」という強い言い回しをしていることから、ダールはこの時の父の様子に不満を感じていたと思われる。

続いて、ダールの実母ソフィー・マグダレーン・ヘッセルバークについて確認する。彼女

はハラルドの再婚相手であり、彼の死後 6 人の子供を育て上げた女性である。また彼女はノルウェー出身であるが、子供たちにイギリスの教育を受けさせたいという亡き夫の意志を継ぎ、イギリスに留まる選択をとっている。

自伝から読み取れる彼女の性格は非常に毅然としており、作中では冷静で頼りになる人物として描かれると同時に、非常に愛情深い人物であったことが強調されている。具体例として、ダールが 8 歳の時に駄菓子屋での悪戯が学校にばれ、校長による鞭打ちを受けたことがあった。ソフィーはこのことを知るとすぐに校長に直談判をしに行く。その際ソフィーは校長に「あなたは外国人だから、イギリスの学校の教育法がわからないんだ」「うちの教育法が気に入らないなら、さっさとお子さんを引き取ってください」（『少年』 69）と言われるのだが、これに対し彼女は「この年度が終わり次第そうする」（70）と言い返し、翌年度ダールに学校を辞めさせている。この話からはソフィーの校長にも怯まない堂々とした様子や、わが子を思う愛情深さを読み取ることができる。

ダールと母親の関係は、生涯を通して非常に良好である。この点に関しては後述するようにダール自身も認めており、作中にも良好な親子関係が描かれている。例えば『単独飛行』の最終場面には、戦時中離れ離れになった親子の再会の様子が描かれているのだが、このダールが「バスのステップを飛ぶように駆けおりて、待ちうける母の腕のなかへ一直線に跳びこんだ」（267）場面は非常に感動的であり、親子愛が強調されたものとなっている。また、ダールは 9 歳で寄宿学校に入ってからソフィーが亡くなるまでに、計 600 通以上の手紙を彼女に向けて書いているのだが（富田 14）、この手間を惜しまず文通を重ねる姿勢からも、深い情愛や親子仲の良さを感じ取ることができるだろう。

加えて、この 2 人の関係性を強く表しているエピソードの一つが、ダールのアフリカ派遣が決定した際の会話である。ダールが 20 歳の時、念願かなって彼は石油会社の東アフリカ支店に派遣されることが決まった。この時ダールは「私は母のひとり息子で、私たち親子の仲はすこぶるよかった。だからたいいの母親なら、このような状況に置かれたら、多少なりとも別離の悲しみに襲われたことだろう」（『少年』 227）と母親の反応を懸念しているのだが、ソフィーは彼の喜びに水を差す気配は一切見せず、「まあ、よかったじゃないの！」「素晴らしいニュースよ！ あなたの希望にぴったりね！」（228）と息子の転機を一緒に喜んでいる。この描写からは、親元を離れることを恐れない息子の様子と、子の自立を受け止め、背中を押してくれる母の様子が伺え、ダールとソフィーは心理的に過度に依存しない親子愛で結ばれていることが推察できる。

そして語りについてだが、ダールの母親に対する語りは非常に肯定的である。『少年』では若くして夫を亡くし 6 人の子供を一人で抱えることとなったソフィーに対し、ダールは「母はわずか数週間のうちに娘と夫を相次いで亡くすことになった。このような二重の不幸に見舞われた母の心境はどれほどのものだったか」（28）と母の心境を慮っており、自身を育ててくれたことへ強い感謝の念を感じていると考えられる。また、上述した校長との会話の場面を一例として、自伝では母の頼もしさや性格を前向きに捉えられる描写が多く、物語

全体を通してダールは母に好意的である。

最後にダールの祖父母について分析する。ダールとの面識が確認できている人物は母方の祖父母であるのだが、彼らはダール一家がノルウェーに帰省する場面にて登場する。彼らの描写はこの帰省場面のみと非常に限定的であるものの、その少ない描写からも愛情深さが伺える。ダール一家が帰省すると、祖父母によって「全員が何度も抱きしめられ、キスされ、年老いて皺だらけの頬に涙が伝う」(『少年』 74)のである。祖母は孫たちにひたすらやさしく微笑みかけており、祖父はもの静かで小柄だが威厳のある学者であったとダールは語っている(75)。この描写からも読み取れるように、母方の祖父母に対するダールの語りは温かいものとなっている。

第3節 家族分析から推察されるダールの家族観

本節では、前節で明らかにした家族との関わりが、ダールのどのような家族観に繋がったのかについて考察する。ここで一度ダールの家族観を考察することで、この考察を本稿の仮説として次章以降の分析に用いることが可能となる。このことにより作品描写や構造を作家の価値観との関係から読み解く視点が得られ、より多角的にダールの家族観を検討することができる。

はじめに、父親ハラルドについて論じる。前節で確認した通り、彼は前向きな性格で挑戦心があり、大家族を養えるほどの経済力があつた。これは当時の「稼ぐ性」としての男性像に当てはまり、ダールも父の経済力を肯定的に捉えていた様子であつた。しかし、「堅実なやり方で成功した男だった」(23)というセリフにて「堅実」という表現を使用し、作中で「(父の成功は実際のところ) どこまでもハードな頭脳労働の賜物だった」(20)と彼の成功までの実情に触れている点を考慮すると、ダールは父を単に経済的事情から尊敬したわけではなく、小さな田舎町出身の身から野心をもって行動し、努力の結果財を成した父を尊敬したと考えられる。

一方で、ダールと父の情緒的つながりは薄く、前節の分析からは、自分たちと一緒に生きる気概を見せず亡くなった父に否定的な感情を抱いていた可能性が確認できた。よってダールの語りには、父に対する尊敬の念と、早期の死別という事実に対する憤りの双方が内在していたと推測できる。このことを踏まえると、ダールは父親に成功を掴む頼りがいだけでなく、子供の傍に寄り添い続けてくれる存在であることを理想として求めたのではないかと考えられる。

続いて、母親については非常に愛情深く、父亡きあと唯一の親として頼りがいを発揮する人物として描かれていたことを確認した。関係も父親と比較すると圧倒的に親密であり、ダールの感情的拠り所となる存在となっていた。『単独飛行』の解説にて映画監督の宮崎は、ダールの自伝に対して「困難の中で平然と生きることを学び、しかも、その支えとして母親の存在があります。でも、時がみちると、家庭からなんの未練もなく堂々と出発していくという、絵に描いたような少年像には目がくらみました」(270)とコメントしており、この母

親の存在がダールの支えとなっていたという見方は、前節での分析の妥当性を裏付けるものとなっているといえるだろう。自伝においてダールの母親は「子供への愛」と「絶対的な安心感」を体現する存在として際立っており、また子供の挑戦を全力で応援してくれる姿勢も、子を手放すことを恐れない成熟した親であることを示している。したがって、母ソフィーは「愛情深い存在」「子供に安心感を与える存在」「子供の成長を喜び、支えてくれる存在」として理想的に捉えられていた可能性が高い。そのため、ダールは母のような愛情やしたたかさ、包容力を理想の家族像に求めたのではないかと考えられる。

最後に祖父母について検討する。彼らは前節で論じた通り、愛情深い様子が肯定的に描かれていた。また、ダールは彼らの家でトゥロウル(troll)や魔女(witch)の話など、北欧神話を聞いていたのだが(Treglown 16)、この神話要素はダールの児童文学にもたびたび登場している。このことから、祖父母の物語はダールの想像力を育み、物語の着想を与えるものとして機能したと考えられる。よってダールは愛情深く、また子供にさりげなく役立つ知識を与えてくれるような教養のある大人として、彼らを理想的に捉えていた可能性があるといえる。

以上のことから、ダールは安心感や頼りがい、子供の成長の見守りや支援、愛情深さ、相手の尊重といった要素を満たす家族・家庭を理想としていたと仮定できる。本論文ではこれを仮説として位置づけ、次章以降の作品分析を通してこれを検証していく。大黒柱としての信頼性や母性愛・家族愛といった観点は、当時も優勢であった伝統的家族観と一致しているが、「相手の尊重」という家族も個人として重んじる姿勢は、第二次世界大戦後の個人化の特徴を踏まえている側面があるといえるだろう。

本章ではダールの家族観形成に影響を与えたと考えられる要因を、時代背景とダールの個人的経験の2点から確認し、それらを踏まえてダールの家族観を考察した。はじめに、ダールの生きた20世紀は戦争により家族や個人の在り方に対する考えが大きく変化した時期であり、家族観も従来の規範と新たな理想の追求の中で揺れ動くものであることが分かった。続いて、ダールの家族は総じて愛情深く、何らかの側面で尊敬できる人物であったことが明らかとなった。特に母親であるソフィーは非常に肯定的に描かれており、ダールの記憶に深く残っているエピソードが多いことから、彼の人生において非常に重要な人物となっていたことが確認できた。最後に、前節の分析より、ダールは家族に安心感や頼りがい、精神的・物理的支援能力、愛情、相手の尊重の姿勢を求めていたと推察し、これを本稿の仮説とした。

第2章 『魔女がいっぱい』『マチルダは小さな大天才』の登場人物・家族関係分析

前章ではダールの生きた時代の家族像・家族観を確認し、ダールの自伝分析を通して彼の家族観を考察した。本章ではその考察を踏まえて、『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』に描かれているキャラクター描写に着目しながら、ダール作品における理想的な家族像を検討していく。はじめに、『魔女がいっぱい』に登場するキャラクターを、続いて『マチルダは小さな大天才』に登場するキャラクターを、言動や家族との関係性に注目して分析することで各キャラクターの家族像・家族観を明らかにする。その後2作品を横断的に分析することで、作品における理想的な家族の傾向を確認する。また、前章で示した仮説との関連性も考察する。

第1節 ぼく一家とジェンキンズ家のキャラクター分析

本節では『魔女がいっぱい』に登場するキャラクターの言動や家族関係を分析し、作中人物の家族像・家族観を確認する。この作品は1983年に出版されており、話の大枠は、主人公の少年が祖母と共に、子供の抹消を試みる魔女達に立ち向かう物語である。作中で主人公は魔女によってネズミに変えられてしまうのだが、彼は最終的に人間に戻ることなく結末を迎えるという奇想天外な展開となっている。この物語で登場する家族は、主人公のぼくと祖母から構成されるぼく一家と、ジェンキンズ夫妻と息子ブルーノから構成されるジェンキンズ家の2家族であり、ここではこの2家族の構成員を分析する。

はじめに、ぼくについて論じる。ぼくは本作において魔女退治の中核を担う重要なキャラクターであるが、唯一の家族である祖母と強い絆を持ち、非常に特徴的な家族観を体現する人物でもある。まず注目すべき点は、彼が「家族＝祖母」という、祖母に特化した家族構成を持つことである。ぼくの両親は既に亡くなり兄弟もいないため、ぼくは祖母に心理的に依存している傾向がある。例えば、ぼくが初めて魔女に遭遇した場面では、「ああ、おばあちゃん、助けに来て！」(62)と心の中で真っ先に祖母に助けを求めており、また祖母が肺炎にかかった際には「恐ろしいことが起こった」(67)と、祖母の死の可能性にひどく恐怖している様子が見られる。極めつきに、最終場面にて祖母にネズミが長く生きられないことを打ち明けられた際に、彼は以下のような会話を繰り返す。

「よかった！　すごいよ！　今まで聞いたなかで、とびきり上等のニュースだよ！」

「どうして、そんなこと言うのかね？」おばあちゃんは、おどろいて聞いた。

「だって、ぼく、おばあちゃんより長く生きるのなんて、どうしてもいやなんだ。ほかのだれかに世話してもらうのなんて、がまんできないよ」

…

「おばあちゃん、いくつ？」

「八十六だよ」

「これから八年か九年、生きられるでしょう？」

「かもしれないね。ちょっとばかり運がよければね」

「生きなければだめだよ。だって、そのころには、ぼくは、すっかりおじいさんネズミになって、おばあちゃんも、すっかりおばあちゃんになって、それからすぐに、ぼくたち、いっしょに死ぬんだから」(266-267)

上記の会話からも読み取れるように、ぼくは自身の寿命が短くなったことに歓喜し、結果として祖母への依存を確固たるものにしていく。児童文学者の Bird は、ぼくがネズミのままになっていることが、祖母との離別の恐怖からの解放になっているということを論じており(120)、確かに上記の描写を踏まえると、ネズミへの変身は祖母の死を恐れていたぼくにとって非常に喜ばしい出来事となっているといえる。未来ある子供の寿命が極端に短くなるのが肯定的に捉えられる上記の描写は、読者にとっては割り切れなさを感じるものではあるが、ダールはこの描写を通して、子供にとっての家族との死別の恐怖が極めて深刻な問題であることを強調しているといえるだろう。

このようにぼくは祖母に対し一定の執着を見せているが、この依存は後ろ向きなものではなく、むしろ前向きなものとして機能する。その具体例が、ネズミへの変化に対する受け入れの素早さである。英語教育及び文学者の Suwastini らは、ぼくがネズミであることを素早く肯定的に受け入れた様子を、陽気な性格(cheerful)として分類していることから推測できるように(121)、この時の様子はぼく個人の性格に結び付けて考えることが可能である。しかし本稿では、彼の陽気さは生得的な性格特性にとどまらず、祖母との良好な関係を通じて形成されたものであると捉える。なぜなら性格と環境要因は強い相互関係にあるため、後述するような受容的な祖母の存在がぼくの自己肯定感に多大な影響を及ぼし、ぼくの陽気さの維持に寄与していると考えられるためである。実際に、ぼくはブルーノに自分がネズミになったことを親は受け入れてくれそうなのかという旨の質問を返された際に「ぼくのおばあちゃんは、ちゃんとわかってくれると思うんだ」(166)と発言しており、祖母の存在が、ネズミ人生の不安を払拭してくれる要素となっていることが伺える。よってこの依存的な祖母と孫の関係は、ぼくに好影響を与えていると推測できる。一方で、ぼくは祖母への依存傾向が強いとはいえ、一人で魔女の部屋や厨房に侵入するなどの単独行動も多く、決して親元を離れないという心理的な依存の仕方はしていない。故に、彼は知的自立や行動的自立を果たしているといえる。

続いて祖母について分析する。ぼくの分析からも分かる通り、祖母は孫との絆が強く、ぼくにとって理想的な存在として描かれている。ぼくが親を亡くしたときには優しく寄り添い、魔女という危険生物から生き延びるための知識を与え、ぼくの意見を聞いて、危険が伴う行動であっても彼の意思を尊重する。そしてぼくがネズミになり寿命が縮むことで、彼女はぼくにとって一生傍にいてくれる存在となり、よりその理想度を高めている。上記引用部分で孫に「ぼくたち、いっしょに死ぬんだから」と言われた際、彼女は「そうなれば完璧ね」(267)と返している。ぼくの「祖母とずっと一緒にいたい」という気持ちに対し、祖母は欲

しい言葉を返してくれているのである。以上から、彼女は母性的なやさしさや包摂的な受容力、寄り添い、子供を導く存在としての側面を体現しているといえる。

もっとも、祖母は理想化された存在として一貫しているわけではなく、人間味のある側面や、物語における変化の受け手としての性質を帯びる場面がある。例えば、彼女は医者から葉巻をやめろといわれても葉巻を吸い続け、ジェンキンズ家の息子ブルーノに対しては無償の愛を注ぐような言動はしない。また、祖母は物語中盤までは魔女に立ち向かうことに否定的であり「ぼうやは、魔女のすることを止めることなんか、できっこないよ」(178)と発言している。しかし、物語後半の孫の勇敢な行動と大魔女討伐という経験を受け、彼女はかつての魔女専門家としての勢いを取り戻し、魔女の本拠地を暴き出す。そして本拠地制圧に積極的な姿勢を見せていることから、彼女も物語を通して個性や成長が描かれる人物となっているといえる。

次に、ジェンキンズ家について確認する。ジェンキンズ家の息子ブルーノはぼくと祖母が泊まるホテルに宿泊していた少年で、食欲な食欲を持ち、常に何かを食べていることが特徴である。彼は裕福な家の子供で、親の権力を自慢し、気に食わないことがあれば「ぼくの父さんが、お前に仕返しするからな！」(137)と自身の優位性を誇示する。このような言動から、彼は親の職業を、広くいえば父親を自己顕示の道具として利用していると捉えることができる。また、彼もぼく同様魔女によってネズミにされているのだが、ぼくの祖母に親の元に戻るかどうか尋ねられた際に、「ぼくんち、父さんも母さんも、ぼくがほしいだけ、いくらでも食べさせてくれるよ。だから、ここにいるより、父さんと母さんというほうがいいや」(201)と発言しており、彼の両親はブルーノに甘やかしてくれる存在として認識されていることも読み取れる。

しかし、親であるジェンキンズ夫妻の甘やかしは実のところ愛情というよりも放任に近い。ミスター・ジェンキンズは初登場時、祖母にブルーノの話題を出されたとき、「あいつ、今ごろ、なにしてるだろうな？ 調理場でもあらしに行ってるんだろうよ」(204)と息子を心配する素振りを見せていない。また、ブルーノは親から常に食べ物をもらっているが、子供の健康を心配するのであれば息子に好きなだけ食べさせる状況は適切でない。この点に関しても彼らの言動を踏まえると、愛情ではなく、息子の食事制限や管理を避けた結果の無関与ではないかと推察できる。実際にミスター・ジェンキンズは「あいつは、いつだって災難にあって苦しんでるよ。食べすぎて苦しんでるし、腹がごろごろ鳴るのにもね」(206)と息子が過食で苦しんでいることを知っていながらも、ひまし油を飲めばすぐに治るからと好きなだけ食べ物を与えているのである(207)。したがってジェンキンズ夫妻の子育ては放任的であり、ブルーノは両親と情緒的なつながりよりも物質的なつながりが強いといえる。

それにも関わらず、ブルーノは甘やかされて育っているが故に自身が愛されていることを当然だと認識している。物語終盤で、ミスター・ジェンキンズはネズミになった息子ブルーノを家に置くか、妻の愛猫を家に置くかの選択を迫られ、当惑する。これに対し、ブルーノは、ネコよりも自分の方が大切なのはあたり前だという旨の発言に同調しており(249)、

親からの愛情を疑わない様子が伝わってくる。彼は上述した親の無条件な受容の態度を、愛情の表れと誤信しているのである。しかし、当の父親が困惑していることから伺えるように、彼の親は息子の期待に応えた反応はしていない。よってこの親子の気持ちはすれ違っており、彼の父はネズミに変わった息子を受容できない、子供にとっては非理想的な親として描き出されているのである。

ジェンキンス夫妻は、父親が一家の大黒柱として家族を支え、母は編み物をするなどという、伝統的な家族役割を持っている。一方で、彼らは放任的子育てや形式的な甘やかし、多様なあり方への不寛容を体現する点で、現代に通ずる課題も持ち合わせているといえる。

第2節 ワームウッド家とハニー家のキャラクター分析

前節では『魔女がいっぱい』に登場するキャラクターを分析し、各キャラクターの家族像・家族観を明らかにした。本節では引き続き、『マチルダは小さな大天才』に登場するキャラクターの分析を行う。この作品は1988年に出版されたものであり、主人公である少女マチルダが、頭脳を用いて家では横柄で卑しい両親に仕返しをし、学校では暴力的な校長に立ち向かう物語となっている。作品はマチルダの家庭の話から始まり、進学を機に舞台が学校へ移る構成をとっている。最初の舞台であるワームウッド家では、マチルダの両親と兄マイケル、末娘マチルダの4人が登場する。そして学校では、マチルダの担任のミス・ハニーと校長のミス・トランチブルという人物が新たに登場するのだが、この2人は姪と叔母の関係にあり、トランチブルはミス・ハニーの親権を持つ。ここでは、この2家族の構成員を分析する。なお、マチルダの兄マイケルは作中描写がほぼ無いため、本稿では分析対象外とする。

はじめに、主人公マチルダについて論じる。マチルダは中産階級の家庭の娘で、独学で読み書きや計算を習得した天才少女であると同時に、自分の才能を認めない両親に不満を抱えている人物でもある。マチルダは「自分の親をこんなふうに憎むのがまちがっていることは、知っていた。しかし、憎まずにはいられなかった」(38)と作中で思っていることから分かるように、親を尊敬していない。彼女は認知力が高いが故に、自分を理解できない親の不完全さの背景が教養不足であることを理解しているものの、親に才能を否定された屈辱的な気持ちを見過ごすことができず、理性と感情の間で苦しんでいるのである。

このような彼女の憎しみの背景には「家族とは自分を理解してくれる存在であるはずだ」という願望が存在していると推測できる。マチルダは読書を通じて様々な価値観を学んでいるため、親の価値観が彼女にとっての価値基準という訳ではなく、むしろ、彼女は親を批判的に見る目を養っている。そのためマチルダは「自分の両親が、正直でやさしく物わかりがよく尊敬できて頭がよかったら、どんなにいいだろう」(67)と常に思っていた。この発言は、まさに彼女が求める理想の親を表していると考えてよいだろう。マチルダはこのように自分を認めてくれ、尊敬できる親を求めているが、実の両親はその期待を裏切っている。よって彼女は両親を拒絶するのだが、心の中では理想的な親を求めるという複雑な感情を持っていると考えられる。

続いて、マチルダの両親であるワームウッド夫妻について分析する。ワームウッド家は、夫が中古自動車ディーラーを営み、妻が家事育児を担うという伝統的な性別役割を持つ家庭である。夫妻はマチルダとは対照的な価値観を持っており、メディアやジャンクフードを好み、マナーレベルや倫理観が低い。また、見た目や肩書、見栄といった表面的価値を重視するため、読書といった知的行為に興味を示さない。ミスター・ワームウッドは「計算機を買えば、そんなこと意味ないでしょうが？」と掛け算を学ぶ意義を否定し、ミセス・ワームウッドは「女の子が男をひきつけるのは、頭がいいからじゃないわ」と女子の学力よりも容姿の重要性を主張する(139)。このことから、読書を通して精神的豊かさを求めるマチルダに対し、両親は表面的・物質的豊かさを求めているといえる。児童文学翻訳家の灰島や英語圏文学者の泉をはじめとした多くの研究者らは、両親とマチルダの価値観の差は階級差の表れであると論じており(灰島 151、泉 51-52)、この解釈に従うならば、この親子の確執は社会的要因に起因する非常に根深いものであるといえる。

またワームウッド夫妻は、マチルダが親の独断的言動に苦しんでいることから分かるように、上記の価値観を子供に押し付ける傾向があり、子供は親の意見に従えばよいという考えを持っていることが推察される。彼らがマチルダよりも凡庸な兄マイケルを好く理由も、彼が親の事業の後継者であることに加え、マチルダとは異なり批判的な発言をしない可能性が高いためと捉えることも可能である。とはいうものの、彼らがマチルダを嫌うのは、マチルダが親に反論するからという単純な理由だけではない。泉によると、ミスター・ワームウッドがマチルダの知的欲求を拒む背景には、他者によって自分自身が否定的ものとして見られることからの防衛や真の自分を知ることへの恐れがあり、心理的防衛態度の結果であると分析している(59-60)。確かに、ミスター・ワームウッドは、マチルダに詐欺で儲けたお金を「それはきたないお金だわ」「わたし、そんなの、嫌い」(35)と言われた際、頬を赤らめて怒鳴っていたり、作中で父親が本を破った様子にある種の嫉妬心が表れていると説明されていたりしたこと(54)、彼は、自己否定の恐怖とその防衛という心理作用に基づいた結果、マチルダの才能を否定していると解釈してよいだろう。ミスター・ワームウッドの言動は心理的動機に基づく人間味のあるものであるが、子供の立場からすると、非常に自己中心的である。そして、親が後継者である息子を鼻屑する一方娘を厄介者扱いする態度は、上述のマチルダの憎しみや家庭の情緒関係の希薄さにつながっているといえる。

続いて、ハニー家について分析する。ミス・ハニーは村医師の娘で、現在はマチルダの通う小学校の教師をしている。彼女は幼いころに両親を亡くして以来、叔母であるミス・トランチブルの保護下に置かれていたのだが、長年叔母の恐怖支配に苦しむこととなった人物でもある。彼女は「十歳になるころには、わたし、彼女の奴隷になっていた。家事いっさいは、わたしの仕事だった。彼女のベッドの用意をし、彼女の着たものを洗濯し、アイロンをかけた。料理もぜんぶ、わたしがつくった。なんでもかでも、やらされたのよ」(282-283)と話し、当時の生活を悪夢どうせんと表現している(281)。この発言や、彼女とトランチブルの関係を、児童文学者の森川が「シンデレラと継母の関係」(89)と表現していることから

も推測できるように、彼女にとって家庭は労働・搾取の場と化しており、家庭において、愛情や個人の意思の尊重は保証されていない。ハニーはこのようなヒエラルキーの中で育ったため、トランチブルに対して全く無力であり、成人してもなお精神的・金銭的支配を受ける状況にあった。

しかし、彼女はトランチブルに完全に従順というわけではなく、反抗的な姿勢も見せている。それが家出であり、彼女はマチルダに出会う2年前に家を借りつけ、叔母のもとを去ることに成功している。このことから、ミス・ハニーは長年叔母の圧力や支配の下にいたが、本心ではその生活から脱した自由な暮らしを求めていたと考えられる。

最後に、ミス・トランチブルについて論じる。彼女はかつてオリンピックの英国代表となった元ハンマー投げの選手で、小学校の校長であるにも関わらず子供を非常に嫌っており、子供のことを「きたないチビの虫けら」(119)などと罵倒している。彼女の家族観には、上述した通り権威性や支配性が色濃く反映されており、恐怖でミス・ハニーを支配していた。また、彼女もワームウッド夫妻同様に表面的な価値で人を判断する傾向があり、子供だから悪質と決めつけ、高圧的な態度をとっている。マチルダのクラスメイトのナイジェルを叱った際には「おまえのおやじさんの商売はなんだ？」(203)と質問し、親の社会的地位と子供の態度を関連付けたラベリングを試みていることから、彼女も子供の内面を見ず、本質的理解を放棄する人物として描かれているといえるだろう。また、直接的な表現はないものの、作中ではトランチブルが、ミス・ハニーの父であり、彼女にとっては実兄であるマグナス・ハニーを自殺に見せかけて殺害し遺産を奪い取ったことが示唆されていることから、彼女が遺産という象徴的権力や、家庭内での地位確立に走った結果このような行動をとったという解釈が可能である。このことから、彼女の表面的価値による物事の判断傾向を伺うことができる。

トランチブルの高圧的態度は、英文学研究者の Sorhie が、劣等感や承認欲求の過剰補償であると主張するように(28-30)、心理的動機と結び付ける余地があるものの、彼女は作中では多くを語られない人物であるためワームウッド夫妻に比べ不確定要素が多く、特定の心理作用に基づいて行動しているとは断定しがたい。むしろ彼女は、森川が論じるように、行動原理が不明な恐ろしい存在としての性質が強い(91)、と解釈する方が妥当であると考えられる。子供にとって特に恐ろしいことは、彼女が「子供＝悪」と断定している点であり、たとえ良い子であっても好意を持たれる余地がない点である。ミス・ハニーはトランチブルに対し基本的に従順であったが、彼女は愛情が注がれる土俵にすら立てていない。よって、トランチブルは愛情や公正な評価ではなく自身の判断や権力、支配関係を常に重要視しており、子供にとって抗うことのできない存在として位置づけられているといえる。

以上を踏まえると、そもそもトランチブルにとってミス・ハニーは実質的な家族とは認識されておらず、法律のみによって捉えられる形式的な家族である可能性も高い。この点もハニー家に愛情が介入する余地がなかった理由として挙げられる。トランチブルが「わたしはおまえに、この長い年月食事をさせてきた。おまえの靴やら服やらを買ってやった！」(285)、

だからおまえはわたしに給料を渡さなければならないのだ(285)、と主張する通り、彼女がミス・ハニーの世話を義務的に捉えていたことは明らかである。さらに彼女は、本来は役割遂行と捉えられる子育て行為に対して、ミス・ハニーの給料の大半という過剰な見返りを要求しており、自己利益的価値観が前面に出ている。そのため、ハニー家のつながりは非常に形式的であり、情緒的つながりが一切表れていない家庭であるといえる。

第3節 4 家族の関係性比較と理想の家族像

本章第1節、第2節にて作中の登場人物の家族像や価値観を明らかにした結果、各キャラクターの家族とのつながりや、家庭内における個々の立ち位置に違いがみられた。本節では前節までの分析結果を踏まえ、2作品に登場する家族の関係性を比較し、理想的な家族の傾向を確認する。ただし、分析結果のすべての要素を個別に取り上げると記述が煩雑になりかねないため、ここでは視点と分析観点を絞ることとする。まず、本節では子供の視点を中心に置いて分析を行う。なぜなら、児童文学は「子どもが読むために書かれた本」(川端 7)であるという性質を持つ以上、子供に向けての理想・非理想が描かれる可能性が高いため、また子供は大人の価値観の受け手であり、かつその価値観を再構築する主体である傾向が高いためである。そして分析観点は「情緒的つながり」と「対等性」の2点に絞って行う。この2点を比較することで、各キャラクターに内在する家族に対する感情の強さや、家族との関係性の差異を捉えることを試みる。また、第1章第3節で設定した本稿の仮説と作中描写の関連性も検討する。

はじめに、情緒的つながりの程度を比較する。まずぼくと祖母は、互いに唯一の家族ということもあり、心理的つながりが非常に強いことが第1節で明らかとなった。一方で、ジェンキンズ家は情緒的なつながりは皆無というわけではないが、ブルーノは食べ物を与えるといった「行為」を根拠に親の愛を感じていたと考えられたことから、物質的つながりに付随する情緒的關係であるといえた。そしてワームウッド家は、親子で価値観が異なる点から感情的つながりが希薄で、ハニー家は、ミス・トランチブルが家庭内での主導権を握っており、愛情が一切見えない家庭となっていた。前節までの分析結果からも読み取れる通り、この中で情緒的つながりが強い家庭はぼく一家のみで、ジェンキンズ家は関係が強いとはいえず、残り2家族は情緒的なつながりが薄いまたは皆無な家庭となっているといえる。

ここで、どの形式の家族が理想的に描かれているのかを確認するために、この情緒的關係が子供に及ぼす影響について検討する。本章第1節で論じた通り、ぼくは祖母とのつながりが自己肯定感の維持につながっていた可能性が高く、祖母はぼくが前向きに生きるための心の支えとなっていた。一方でジェンキンズ家は、親子共々互いを嫌う素振りはなく、むしろブルーノは両親を好んでいた。しかし、ブルーノは物質を介して人の感情を測るなどの歪んだ価値観を身に着けており、また彼がネズミになるという不測の事態には、現在の親子関係の破綻の可能性が孕まれていたことから、ジェンキンズ家の関係性が子供にとって一貫して肯定的影響を及ぼしているとはいいがたい。ワームウッド家やハニー家に関しては

前節で分析した通り家庭内の愛情が欠如しているため、マチルダとミス・ハニーは血縁家庭に対する反感が強く、ハニーに関しては家出を決行している。以上のことから、情緒的つながりが強い家庭の方が、より理想的な家庭として描かれていると判断できる。

次に関係の対等性について分析する。ぼくと祖母の関係については、保護者兼指導者である祖母と庇護対象者であるぼくという立場だけで見ると、祖母優勢の関係であるように捉えられる。確かに祖母は作中で「話のじゃまをするんじゃないよ。おばあちゃんの言うこと、そのまま信じてしまえばいいの」(33-34)と発言しており、祖母からの一方的なやり取りがあることは否定できない。しかし彼女はぼくに知識を常に一方的に教えるのではなく、ぼくの質問を交えながら魔女についての情報を与えていることから、対話ができる関係性を物語冒頭から築いているといえる。また、上記の「話の邪魔をするんじゃないよ。…」というセリフは、ぼくの「おばあちゃん、どうして(魔女が就寝時以外は常に手袋をしていることを)知ってるの?」(33)という質問の直後に出てきたものであるため、この発言は祖母が回答を拒否する権利を行使した結果と考えることができる。祖母はぼくの質問を完全に受容しているわけではなく、ぼくが質問する権利を持つと同様に、祖母はそれを拒否する権利を持つのである。以上から、魔女についての知識を教えるこの場面は2人の対等性を表しているものであるといえる。

また、彼らの対等性は魔女退治の際にも見受けられる。祖母は当初、ぼくの「魔女の部屋に侵入する」という作戦に反対していたのだが、ぼくの話をも最後まで聞き計画が単なる無謀なものではないことを理解すると、最終的にぼくの意志を尊重する。このように彼らは対話を通して関係を深めているため、対等なパートナーシップを築いているといえる。

ジェンキンズ家の関係は、一見子供の欲求を尊重しているように思われるが、先述した通り表面的な関係しか築かれていないため、非対等となっている。親は子が欲しがるとして与えるという責任逃れの態度をとっており、親から子へ物質などがもたらされる一方的な関係である。ワームウッド家も、ジェンキンズ家同様に非対等な関係となっている。そもそも父が上位、妻や子供が下位という家庭内の権力構造に加え、価値観の違いから、お互いの内面に踏み込んだ対話ができている。両親はすぐにマチルダの発言を馬鹿にしたり、怒鳴って否定したりとマチルダの言葉の真意を理解しようとせず、マチルダも両親の説得を諦めている様子である。このように、ワームウッド家では家庭内のヒエラルキーに加え、価値観の違いという圧倒的な溝が、非対等な関係を助長している状況となっている。そして、ハニー家は前節の「シンデレラと継母の関係」(森川 89)という言葉が象徴的に示しているように、作中において極端な非対称性を体現している家庭である。家庭内においてトランチブルが絶対的支配者として君臨し、ミス・ハニーはそれに従属・搾取される。そこでは自由や意思は極端に制限されており、完全に非対等である。

以上の比較とそこでの子供の様子から、対等性が高い家庭である方が、子供の自尊心が満たされ、主体性も尊重されているため、子供にとって理想的であるといえるだろう。そのため、ダール作品では情緒的つながりが強く、親子の関係が対等である家庭が理想的に描かれ

ていると考えられる。また、本章で取り上げてきた家族の中で、これらの要素を持ち合わせている家庭はぼく一家となっており、反対に一番理想的要素を持ち合わせていない家庭はハニー家となっていると判断できる。

最後に、本稿の仮説と作中描写の関連性を検討する。第1章第3節にて、作者の理想とする家族像には「安心感・頼りがいがある」「支援能力が高い」「愛情深い」「相手を尊重する姿勢がある」という特徴があると推察した。そして、今回の分析で明らかとなった「情緒的つながりの強さ」や「対等性の高さ」が肯定的に描かれているという点は、愛情深さや相手の尊重の姿勢を重視するダールの価値観に当てはまっているといえるだろう。また第1節のキャラクター分析では、祖母の支援能力が高いことや頼りがいがあるという結果も出ており、特定の登場人物の特徴と、作家が理想としていたと思われる母親ソフィーの人物像に一致する点が多いことが伺える。加えて、祖母がぼくを危険な場所に送り出す様子も、第1章第2節で触れた、子供の意思を尊重する母ソフィーとダールの関係に酷似している。よって作中家族、特にぼく一家の描写は、仮説の一部要素を裏付けているといえる。

本章では、『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』の2作品に登場するキャラクターを分析し、それを踏まえて理想的家族の特徴を検討した。まず、『魔女がいっぱい』に登場するぼくは祖母に依存した家族観を持ち、祖母は理想的存在として描かれていた一方で、ブルーノは家族を表面的要素や行為を通して認識しており、彼の両親は伝統的性別役割と放任的な養育観を持つことが分かった。続いて『マチルダは小さな大天才』において、マチルダは両親を憎むものの心の中では理想の親を求めているという複雑な心理を抱えていたのに対し、ワームウッド夫妻は自己中心的で、表面的な価値観に基づいてマチルダに接していることが確認された。また、ハニー家は非常に権力主義的かつ形式的な家庭であり、ミス・ハニーはこの状況を脱した生活を求めていることが明らかとなった。最後に、作中の家族を比較した結果、ダールは情緒的つながりが強く、対等な関係を築いている家庭を理想として描いている傾向にあるといえた。これら要素は本稿の仮説における「愛情深さ」や「相手の尊重の姿勢」に重なっており、また、特定の人物像もそれらを裏付けていたことから、この2点における仮説の妥当性が示された。

第3章 『魔女がいっぱい』『マチルダは小さな大天才』の構造分析

前章では、第1章で仮説とした作家の家族観を踏まえつつ、登場人物の関係性の観点からダール作品における理想的な家族像を検討した。本章では作品を通して家族がどのように機能し、またその機能がどのように変化したのかという、構造面に着目して分析を行う。はじめに『魔女がいっぱい』に登場する2家族の機能と、その機能の変化について分析し、続いて『マチルダは小さな大天才』に登場する家族も同様に分析していく。最後に、家族機能の観点から両作品を比較し、理想の家族像と仮説との関連性を検討した上で、彼の家族描写の意義を論じていく。

第1節 『魔女がいっぱい』における家族機能と機能変化

本節では、『魔女がいっぱい』に登場する家族の機能とその変化について論じる。家族機能について論じるにあたり、物語内で特定人物がどのような影響や役割を持つのかという点にも着目することとなるため、前章での分析結果と重複する部分も多いことをあらかじめ断っておく。また前節に引き続き、子供の視点を中心に据えた分析を行うため、ここでは「子供にとって家族がどう機能しているか」という観点から家族を読み解いていく。

はじめに、ぼく一家の機能について分析する。まず物語冒頭において、ぼくは両親を亡くすという家族の断絶を経験している。その後には彼は祖母と生活を開始しているため、ぼく一家は物語前半で、既に再構築された家族であるということができよう。そのような経緯で形成されたぼく一家は当初、精神的支柱としての機能や、子供を脅威から守るための安全保障機能・教育機能を備えていたといえる。なぜなら、家庭の構成員である祖母は、第2章第1節で論じたように、物語冒頭では両親を亡くしたぼくを慰め、魔女からの危険を回避するための知識を与える人物として描かれていたためである。

しかし、物語中盤でぼくは大魔女に遭遇し、ネズミに変えられてしまうという一大事件が発生する。これを受けて、ぼく一家は魔女の脅威からの回避という姿勢を改め、「ぼくたちが、やらなけりゃね」(184)と魔女討伐の方向へと進む。ここでぼくたちには「大魔女討伐」という大使命が科されるようになったため、子供を魔女といった危険から守る安全地としての家族機能にも変化が生じている。使命のために、祖母は孫の作戦を採用し、彼を危険な地に送り出すようになっているのである。祖母は「おばあちゃんが、ぼうやをこの靴下の中に入れて、大魔女のバルコニーまでおろすからね」(186)、「ぼうやには、できるよ。がんばって」(187)などと発言していることから、むしろ作戦に乗り気な様子である。よって、物語を通してぼくの主体性が尊重されるようになった一方で、ぼくに対する安全保障機能は弱まっているといえるだろう。しかし、第2章第3節で論じたように、ぼくの主体性の尊重は家庭内における対等性の向上につながっており、彼らは物語を通して協働的機能を強化しているといえる。

続いて、ジェンキンズ家の機能を分析する。ジェンキンズ家は父親が一家の大黒柱に位置するという伝統的な家族役割を備えている家庭であり、第2章第1節で論じた通り、息子

ブルーノにとっては、社会的な優越感や物質的満足感を提供してくれる場として機能していた。一方で親子の情緒的つながりが乏しく、家庭は子供を強く否定することはない無条件な受容の場として機能していたものの、子供の教育機能は十分に果たしていなかった。これはブルーノが肩書といった表面的な価値基準で人を判断する傾向や、物を介して他者の気持ちや量を量る価値観を身に着けてしまっている点が理由に挙げられる。また、ブルーノはホテルのテラスにて虫めがねで太陽の光を集めてアリを一匹ずつ焼いており、「ぼく、アリが焼けるの見るのが好きなんだ」(137)と発言している。この描写は、生命の尊さを理解しきれていない子供なりの残酷さといえるかもしれないが、彼の価値観が訂正されていなかったり、そもそもこの状況が親の目に届かず見過ごされてしまっていたりする点には、親の教育・指導不足を指摘することができるだろう。

ジェンキンズ家の機能は物語中盤では上記のようなものであったが、この家庭もぼく一家同様に、息子がネズミに変わったことで転機が訪れる。親がネズミへと変化した息子を即座に受け入れることができず、親の無条件な受容の態度の維持に懸念が生じたのである。父親は「で、で、でも、ブ、ブ、ブルーノ！ ど、どうしてこんなことになったんだ？」(248)と動揺が隠し切れず、母親はネズミに変えられたブルーノと対峙した際、いちだんと大きな悲鳴を上げている(256)。おそらくネズミという姿は、ジェンキンズ夫妻の無条件の愛を受ける要件から逸脱しているのであろう。確かに親がいきなり、子供がネズミになってしまったという事実を受け入れることは難しい。祖母は魔女について詳しくあった為今回の出来事を素早く受け入れることができたのであって、上記のように、すぐに対応できなかったジェンキンズ夫妻を責めることは早計である。しかし、ブルーノの視点に立ってみると、今まで受容的であった親が急に拒絶の姿勢をとっているのである。

作中ではこのような不穏な状況でジェンキンズ家は退場する。情報が不十分であるためこれから論じる内容はあくまで仮説的な解釈に留まるが、今後この家族に起こりうる機能変化についても論じておく。まず、ネズミであるブルーノが親に受容されきれなかった場合、第2章第1節で論じたような、ブルーノの「親は自分を愛している」「いざとなったら親が助けてくれる」という家族認識が否定されるため、家庭はアイデンティティ形成・維持のための支援機能を失う可能性が考えられる。また、親が子供を完全に否定する場合には、面倒を見てくれる人が不在となるため、家庭における最低限の生活支援機能、安全機能の維持すらも懸念される。一方で、ジェンキンズ夫妻がネズミになったブルーノを受容できた場合、祖母とぼく同様に良好な関係を築いていく可能性は大いに考えられる。彼らは物語終盤において家庭の在り方が大きく揺らぐ不穏な状況ではあったものの、結末が描かれていないため、家族が断絶したとは限らず、再構成の余地が残されているといえよう。

第2節 『マチルダは小さな大天才』における家族機能と機能変化

前節では『魔女がいっぱい』における家族の機能とその変化を確認し、両家族とも子供がネズミに変えられてしまうという事態を受けて家族の在り方に変化が生じていたことを明

らかにした。本節では、前節と同様に『マチルダは小さな大天才』に登場する家族の機能とその変化について論じていく。本節で分析する家族は、計3家族である。『マチルダは小さな大天才』は、物語終盤でワームウッド家とハニー家の2家族が混ざって新しい家族が再構築されるという、大胆な家族変化が起こる。具体的には、ミスター・ワームウッドの商売における悪事が露呈したことで一家は海外へ逃亡せざるを得ない状況に陥るのだが、引越しを拒んだマチルダが、担任のミス・ハニーに引き取ってもらうのである。よってここでは、前章で取り扱ったワームウッド家とハニー家に加え、物語終盤で再構築された新しい家族についても分析を行う（以下ミス・ハニー&トランチブルの家庭を「旧ハニー家」、マチルダ&ミス・ハニーの家庭を「新ハニー家」とする）。

新ハニー家については前章で確認していないため、構成員の関係について整理しておく。新ハニー家の構成員であるミス・ハニーとマチルダは、元々は教師と生徒の関係にあり、ミス・ハニーは、マチルダの才能を伸ばせる環境を用意しようと気にかけてくれる存在であった。そして物語後半で、マチルダに魔法が使えるようになった事を明かされたミス・ハニーは、彼女を自宅に招き、第2章第2節で論じたような過酷な環境で育ったことを打ち明ける。ここで、2人はお互いに秘密を共有し合う関係へと発展しているのである。

その後の、マチルダがミス・ハニーの養子となった際の彼女らの関係は作中では描写されていないのだが、代わりに2人が家族になる直前の様子が描かれている。マチルダはトランチブルの逃亡以降、放課後は毎日ミス・ハニーの持ち家を訪れて、彼女とティータイムを楽しんでいた。学校外における彼女らの関係はここでの描写から読み取ることができる。該当シーンにおいて、マチルダの様子は「彼女は、ミス・ハニーと過ごす午後のひとときを、とても愛していた。ミス・ハニーのそばにいと、この上なく心が落ちつくのだった。ふたりはたがいに、ほぼ対等の人間として話しあうのだった」(327)と描写されている。そして、ミス・ハニーも「この子といっしょにいと、退屈することがない。わたしは、この子のそういうところが好きだ」(329)と感じており、これらのセリフから、彼女たちは互いを好ましく思い、この関係に非常に満足している様子が読み取れる。またマチルダの発言からは、2人が対等な関係を築いていることも分かる。よってこの家庭は、前節で論じた情緒的つながりの強さと対等性の高さという要素に当てはまっており、登場人物の関係性の観点から見て理想的傾向が高いと判断できる。これはあくまで2人が友人関係にあった際の描写ではあるが、新ハニー家はこの描写の直後に形成されているため、家庭内における2人の関係もこの時のものが土台になると推測できる。

以上を踏まえて、ここからは『マチルダは小さな大天才』における家族の機能とその変化について分析していく。はじめに、ワームウッド家について論じる。ワームウッド家もジェンキンス家同様に伝統的家族役割を持ち、父が仕事、母が家事・育児を担う家庭である。そして彼らは子供に衣食住を与え、テレビなどの娯楽も備えていたため、最低限の教育・保護機能を果たしていたといえる。しかし、父親は本を欲しがるとマチルダに「テレビじゃ気に入らないというのか、え？　うちには、十二インチ・スクリーンのすてきなテレビがある。そ

れなのに、本を買ってくれとは！ あまったれたことを言うのも、いいかげんにしろよ！」(15-16)と言い放ち彼女の要望を拒否していたり、母親は昼間に子供を家に放置しビンゴに行くといった行動をとっていたりするため(16)、家庭が子供にとっての十分な教育機能や保護機能を備えているとは言いがたい。マチルダが図書館の本で知識を学び、ミス・ハニーに、魔法は「注意深くとりあつかうべきことがらなのよ」(254)などと道徳教育をしてもらっていることから分かるように、マチルダは家庭で欠落している教育機能を他の場所で埋め合わせているのである。一方で、マチルダの兄マイケルには「おまえがどれだけ頭が働くか見てみようじゃないか」(70)と父親自らが計算を教えていることから、親の教育姿勢には兄妹格差があるといえる。これは第2章第2節でも言及したような、息子最良な親の態度が大きく影響していると思われる。

また、先述した通り、ワームウッド家は一貫して娘の才能・行動・欲求などを抑圧・否定する場となっていたため、マチルダの自己実現を支援する機能が弱く、情緒的機能も乏しい。マチルダは両親に仕返しをしないと気が狂ってしまいそうになる程家庭にストレスを抱えていたため(39)、この家庭は子供にとって心理的に安心できる場ではなかったと推測できる。

このような状況のワームウッド家に転機が訪れるのは、海外逃亡を図る両親に対し、マチルダがイギリスに留まりたいと打診した時である。英国児童文学者の安藤はこの時の様子を「ここではワームウッド夫妻が『試されて』いると解釈できよう」(11)と論じているのだが、彼の主張する通り、ワームウッド家もジェンキンズ家同様、家族を再構成する余地が与えられているといえるだろう。しかし、マチルダがイギリスに留まりたい、そしてその際担任のミス・ハニーに面倒を見てもらいたいという旨を両親に打ち明けた際、母親は夫に「あの子がそうしたいって言うんなら、そうさせればいいじゃないの。面倒見なきゃならないのがひとり減るってもんじゃないか」(339)と発言し、それを受けて父親も、ミス・ハニーに「その子が残りたいのなら、残ればいい。こっちも、そのほうがありがたいのさ」(340)と言い放っている。結局夫妻は娘に対する態度を変えず、親子関係は修復に至ることなくマチルダは家を離れるのである。よってワームウッド家は物語終盤まで一貫して、情緒的機能に乏しい家庭として描かれていたといえることができる。

次に、旧ハニー家について論じる。ミス・ハニーは3歳で母を亡くした2年後に父を亡くし、その後にミス・トランチブルが正式に後見人になるという経緯を経ている為、前節で論じたべく同様、幼くして再構築された家庭を持つ。この旧ハニー家では、前章第2節で指摘した通り、ワームウッド家よりもさらに劣悪な子供の抑制が行われており、家事いっさいはミス・ハニーが担い、彼女が何度もトランチブルの「奴隷だった」(283, 286)、「支配されていた」(282)、「おそれおののいて生きていた」(283)などと口にするところからも分かるように、心理的にも親に反抗できないようにしつけられていた。そのため、家庭内における協調は存在せず、家庭は情緒的な安心や自己形成の場ではなく、子供の主体性や感情表現を抑圧する、労働搾取の場として機能していたといえる。

一方で、トランチブルが「わたしはおまえに、この長い年月食事をさせてきた。おまえの

靴やら服やらを買ってやった！」(285)と主張し、ハニーが教員養成学校に通うことを許可している点から、旧ハニー家も最低限の養育機能は備えていたと考えられる。しかし、この機能は文字通り最低限で、ミス・ハニーは作中で「わたし、成績がよかったの。だから、かんたんに大学に入れたと思うんだけど、そんなこと問題外だった」「家の用事をしなければならなかったから」(283-284)と話している。そしてマチルダにどのように教師になったのかと聞かれた際には、「レディングに教員養成学校があるの。ここから、バスでほんの四十分のところ。わたし、毎日午後まっすぐ家に帰って洗濯とアイロンかけと、家の掃除をし、夕食をつくるという条件で、そこへ通うことを許されたの」(284)と説明している。このことから、彼女は家事のために大学進学を諦め、条件付きで何とか教員養成学校に通ったことが読み取れる。よって、子供の進路が親の圧力によって制限されているという点で、旧ハニー家の教育機能は高くないと判断できる。

この家庭に変化が訪れたのはミス・ハニーが家を出た時である。この家出は突然で、彼女はトランチブルに相談することもなく家を借り付け、軽い事後報告のみで事態を済ませている。その時の様子をハニーは以下のように語る。

「...『家を借りたんです』と、わたしは言った。

叔母は、逆上したわ。『家を借りただって！ いったい、どうして家を一軒借りられるんだ、一週一ポンドしかもらっていないのに？』って、わめいたわ。

『借りられたんですよ』と、わたしは言った。

『で、どうやって食べ物を買うんだ？』

『なんとかします』って、小さく答えて、玄関のドアからとびだしたの」(288-289)

このように、ミス・ハニーはトランチブルの質問に対しそっけなく答え、最終的に家を飛び出していることから話し合いの余地を与えていない。以上から、ワームウッド家も旧ハニー家も終始子供を抑圧し、彼らの意思を否定する姿勢を貫く存在として描かれていたことが分かる。そのため物語では、これら家庭で育った2人のヒロインであるマチルダとミス・ハニーが血縁家族を脱し、新たな家庭を築いている。

最後に、ワームウッド家とハニー家の変化の末に構成された、新ハニー家の機能について論じる。上述した通り、ミス・ハニーとマチルダは情緒的つながりが強く、対等な関係を築いていることに加え、マチルダがハニーとの時間を愛していたことから分かる通り、家庭はマチルダにとっての精神的支柱としての機能を果たしている。そして、マチルダがミス・ハニーの計らいでトランチブル失脚後最上級クラスに飛び級していることから、新ハニー家は、ワームウッド家に比べ教育環境が整っていることが期待できる。また、この家庭はマチルダにだけでなく、ミス・ハニーにも成長の機会をもたらしている。マチルダはミス・ハニーと話している際に「マウスの心臓は、一分六百五十回の割合で鼓動するってこと、知ってる？」(328)と本で学んだ内容を披露するのだが、ミス・ハニーはほほえみながら「知ら

なかったわ」(328)と答え、質問を交えながらマチルダの話に耳を傾けている。そして彼女は「この子って、なににでも興味をもっているらしい」(329)とマチルダの知識欲に感心するのだが、この描写からは、マチルダとの会話がミス・ハニーに新しい知識をもたらすだけでなく、子供の好奇心を通してハニーの感受性が刺激されていることが読み取れる。よって新ハニー家は、親子共に成長をもたらす、相互成長の場として機能していることが伺える。

第3節 5 家族の機能比較と家族描写の意義

本章第1節、第2節にて、各作品に登場する家族がどのような機能を持つのか、またその機能がどのように変化しているのかについて分析した結果、各家族の備える機能やその程度が異なることが明らかになった。本節では、前節までに明らかにした2作品における家族機能の差異に着目し、機能面からどの家族が理想的であるのかを検討し、第1章で仮定したダールの家族観との関連を指摘する。そして、本論文全体の分析を踏まえて、ダールの描き出す家族の意義について考察する。

第1項 5 家族の機能比較と理想の家族像

本項では、各家族の機能を比較し、作品においてどの家族が理想とされているのか、また本章で分析した家族描写と仮説にどのような関連性があるのかを確認する。これまでの分析で、ぼく一家は精神的支柱としての機能を果たすとともに物語を通して協働的機能を高めていた一方で、ジェンキンズ家は子供の自己肯定感を支える場として機能していたものの、教育機能や情緒的機能に乏しいことが明らかとなった。また、ワームウッド家や旧ハニー家では、教育機能や保護機能、精神的安心感が欠落する一方で、新ハニー家ではそれらの機能が回復され、相互成長機能が備わっていることを確認した。ここでは、第1節、第2節の分析でも指摘した「安全保障機能」と「教育機能」の観点から理想の家族の傾向を検討していく。情緒的機能に関しては、第2章第3節での情緒的つながりの話と重複するため、本項では省くこととする。

はじめに、安全保障機能について確認する。本章第1節で論じたように、ぼく一家は大魔女討伐に伴い安全保障機能が弱まっているといえた。しかし、これは魔女退治という特別な場面における機能の弱体化であるため、家庭内においてぼくが暴力や不安にさらされる状況はなく、家庭に絞ればこの機能は保障されているといえる。そしてジェンキンズ家も、これまでの分析から子供の身に害が及ぶ環境ではなく、安全が保障されていることが伺えた。ワームウッド家や旧ハニー家は最低限の安全保障はされているものの、状況によっては、子供は親からばかだなどと罵倒されていたり(『マチルダ』30)、恐怖で支配されていたりしたため、精神的な意味での安全保障が十分とはいえなかった。一方新ハニー家は、相互尊重の関係が築かれているため、安全保障機能は備わっていると考えられる。よって、安全保障の観点でいえば、ぼく一家とジェンキンズ家、新ハニー家がより理想に近いといえる。

次に教育機能を比較する。ぼく一家は、祖母がぼくに魔女の見分け方を教示する場面があ

り、子供の学習機会が設けられていた。また、第2章第1節で、祖母はぼくの行動に感化されてかつての勢いを取り戻したと論じたが、この様子からは親も子から学ぶ姿勢が描かれていることが読み取れる。しかし、ジェンキンズ家はブルーノの言動に価値観の歪みがみられたことから、社会性や倫理観を学ぶ場が十分に提供されていないといえた。またワームウッド家も、家庭内での読書が推奨されなかったことなどから十分な学習機会が与えられていないといえる。旧ハニー家は、ミス・トランチブルがミス・ハニーに家事をすべて押し付け、結果的にハニーの大学進学が阻害されていたことから、この家庭も教育機能が低いと考えられた。対して新ハニー家では、ミス・ハニーがマチルダの教育環境の整備に意識を向けていたことから、教育機能が期待できる家庭といえた。さらに新ハニー家は相互成長機能も備えていたため、ぼく一家のように家庭内に学びあう環境があることが推測できる。以上から、教育機能の観点では、ぼく一家と新ハニー家が理想に近いといえる。

上記の比較を踏まえると、本章で扱った家族の中では、ぼく一家と新ハニー家の理想的傾向が高く、続いてジェンキンズ家、ワームウッド家、旧ハニー家という順になると考えられる。よって、第2章第3節で論じた登場人物の関係性の観点から見ても、本項で着目した家庭の機能面から見ても、理想の家庭は一致しているといえる。

ここで、第1章の仮説との関連性を検討する。本項で2作品の家族機能を比較した結果、安全保障機能と教育機能を備える家庭が理想的に描かれる傾向にあることが明らかとなった。この安全保障機能や教育機能といった要素は、第1章で仮定した要素のうち、「精神的・物理的支援能力」や「安心感」、「頼りがい」に近いといえる。そして、これら機能を著者ダールの家庭に当てはめてみると、第1章第2節で分析した通り、彼の家は愛情深い家庭であり、子供が暴力や不安にさらされる環境ではなかったことが読み取れたため、ダール家は子供にとって安全が保障される場として機能していたと考えられる。また、母親であるソフィーが亡き夫の意志を継ぎ、子供たちの教育に関心を向けていたことから、教育機能を備えている家庭であるといえた。以上よりダール家は上記要素を満たすため、ダールはこれらを理想の家族の要件として意識していたと考えられる。したがって、作中描写は自伝の記述と一致しており、仮説とも符合するため、作中で安全保障機能や教育機能の高さが理想的に描かれていることは、「支援能力」や「安心感」、「頼りがい」という仮説の3要素の妥当性を支持するといえる。

第2項 ダールの描く家族描写の意義

本論文では、第2章から前項までにかけて『魔女がいっぱい』『マチルダは小さな大天才』に登場する家族を登場人物、構造面に着目して分析してきた。本項では、これまでの分析結果を踏まえて、ダール作品における家族描写にはどのような意義があるのかについて論じる。流れとして、ここではまず先行研究で論じられている意義について確認し、その後本論文で作品の横断比較を行った結果見えてきた観点から彼の描く家族の新たな意義を指摘する。先行研究に関しては、下記で取り上げる指摘以外にも、ダール作品が主体的子供像

を描き出す点や、非理想的な大人の描写が社会批判や大人への教訓として機能する点等から作品の意義が唱えられているのだが、本項では家族描写の意義に着目したいため、次の主張を取り上げることとする。

本項で取り上げる指摘は、ダール作品は伝統的かつ革新的であるというものである。これまでの分析から読み取れる通り、ダール作品は母性愛といった伝統的価値観を肯定する一方で、家父長制といった伝統的な家族構造を持つ家庭を否定的に描いている。英文学・児童文学者の Alston はこの点について、“This, then, is the complexity of Dahl; the signifiers of what make a good family remain conventional but at the same time the reality of the single mother as the ideal mother in *Matilda* seems radical and forward looking” (94)と説明しており、ダール作品は保守的かつ急進的な家族像を表すものであるという主張が理解できる。確かに、第1章で論じたように、ダールの生きた時代は伝統的な家族の価値観も根強かったため、そのような時期に非血縁家族や片親家族を肯定的に描いた点は革新的であるといえるだろう。しかし、この指摘は『マチルダ』という特定の作品を前提とし、かつ家族の理想や再生産が成立している状況に焦点を当てているため、必ずしも他家族や、その過程で描かれる失敗・不十分さには目が向けられていない。そこで本項では1作品に限らず、非理想的家族も含めた様々な家族像に着目して、ダールの提示する家族像の意義を検討していく。

まず注目したい点が、家族の再構成の多様さである。本章第1節、第2節の分析でも指摘した通り、本稿で取り扱った家族は物語内で必ず転機を迎え、何らかの形で家庭の変化や再構成を経験していた。それら家族を再構成の観点から分類してみると、ぼく一家や新ハニー一家は家族の再構成に成功した家族、ジェンキンズ家は再構成が期待される家族、ワームウッド家は再構成を拒んだ家族、旧ハニー家は再構成の余地すら与えられなかった家族という構図になっていることが伺える。このことから、ダール作品には多様な家族の再構成の様子が描き出されていることが分かるだろう。

また『マチルダ』をはじめとしたダール作品は、子供対大人、善悪といった二項対立での描かれ方が指摘されることが多いが、上記のように作品を横断比較することで、実は作品単体で見ただけには非理想的家族として捉えられる家族、本稿においてはジェンキンズ家が、比較的理想的要素も含んでいたり、非理想的要素の程度が低かったりすることが浮かび上がってくる。そしてワームウッド家も、完全悪であるトランチブルと比較すると非理想度が低いといえたことから、ジェンキンズ夫妻やワームウッド夫妻は善悪の二項に収まりきらない、中間的存在ということができる。よってダール作品において一見二項に収まるように見える家族描写は、実際にはグラデーション的な描かれ方がされているといえるのである。

次に指摘したい点は、再構成に成功した家族も完全に理想的というわけではなく、再構成の過程や将来に、不安定さや問題を含んでいる点である。本稿では、ぼく一家と新ハニー一家が他家族と比較して理想的要素を多く含むことを指摘した。しかし、例えばぼく一家には、祖母は本当にぼくが死ぬまで生き続けることができるのか、ぼくは本当に祖母との離別の

恐怖を克服できている状況にあるのかといった疑問が残っており、新ハニー家に関しても、マチルダはミス・ハニー以外を家族として選ぶ余地があったのかといった懸念が指摘できる。そのため、作中では上手く理想的に描かれている家族にも不完全さが含まれているといえるだろう。また、『魔女がいっぱい』に登場するぼくやブルーノは、当初から家庭に不満を抱えていない人物ではあったが、結局両家とも家庭の再構成に迫られていた様子から、理想の家族というものは永続的でないことも読み取れる。よって、ダールの描く理想的な家族は完璧というわけではなく、成立過程に不安定さが含まれていたり、比較的理想的な家庭でも将来的な安定性を保証してくれていたりはないのである。この点に関しては、「家庭というものは不安定であるからこそ、ダール作品では理想的家族にも非理想的家族にも家庭の再構成が求められている」と捉えることができるのではないだろうか。

このように、ダールは作品を通して理想的家族の傾向を示しながらも、各家庭が抱える問題を描き分け、二項対立に収まらない多様な家族像や再構成の様子、またその複雑さを描き出している。よって彼の描く家族は、先行研究でも指摘されていたような、片親家族という「構造面で多様な家族像」を提示する点にだけでなく、「家族変化の多様さや家庭の抱える問題をグラデーショナル的に提示する点」や「変化（再構成）を前提とした家族に対する考えを提示する点」に意義があるといえよう。

本章では、『魔女がいっぱい』『マチルダは小さな大天才』に登場する家族における家族機能とその変化について分析した。まず、ぼく一家は常に精神的支柱としての機能を担い、物語を通して協働的機能を強めていた一方で、ジェンキンズ家は、情緒的機能や教育機能に乏しく、最終場面で家族の再構成が求められているといえた。次に、ワームウッド家や旧ハニー家は、物語を通して教育機能や精神的安全保障機能が欠乏している存在として一貫していた一方で、新ハニー家ではそれらの機能が補完され、相互成長機能も備えていることが読み取れた。最後に、本章の分析結果を基に理想の家族像を検討した結果、安全保障機能と教育機能を備えるぼく一家と新ハニー家の理想的傾向が高く、またこれら要素は仮説における「精神的・物理的支援能力」や「安心感」、「頼りがい」の要素に一致することを指摘した。さらに、ダールの描く家族は「家族変化の様子や各家庭の抱える困難をグラデーショナル的に提示する点」や「変化を前提とした家族観を提示する点」で意義が認められた。

終章

ロアルド・ダールは『チョコレート工場の秘密』や『マチルダは小さな大天才』といった数々の有名作品を輩出している 20 世紀のイギリスを代表するウェールズ人作家である。彼の作品はブラック・ユーモアを特徴としており、その独特な作風は、先行研究において主に女性描写を対象としたフェミニズム的分析や、大人と子供の対立構造・関係性に着目した議論の対象となってきた。しかし、作品には孤児やいじわるな継母といった何らかの形で問題を抱えた家庭が数多く登場するにも関わらず、家族そのものに焦点を当てた研究は限られており、特に複数作品を対象とした横断研究は十分とはいえない。そこで本論文はダールの家族観を主題とし、彼の自伝と『魔女がいっぱい』『マチルダは小さな大天才』に登場する家族を分析することで、彼の家族観と、ダール作品における家族描写の意義を明らかにすることを目的とした。研究手法は、作家分析と作品分析を組み合わせたものである。まず自伝分析からダール個人の家族観を考察し、この考察を本稿の仮説として作品分析に用いつつ、作中描写から理想的家族の傾向を確認した。

第 1 章では、時代的背景とダールの自伝を分析し、彼の家族観を考察した。まず、ダールの生きた時代は伝統的男女役割や家父長制といった価値観が依然として強かった一方で、ライフスタイルや価値観が多様化しており、従来の家族観からの脱却を模索する時代であったことを明らかにした。次に、ダールの自伝に登場する彼の両親・祖父母の描写分析から、ダールの周囲の大人は非常に愛情深く、尊敬できる人物であったことを確認した。最後に、前節の分析結果から、ダールは安心感や頼りがい、子供の成長の見守りや支援、愛情深さ、相手を尊重する姿勢を理想の家族の要素としていたのではないかと論じ、これを本稿の仮説とした。

第 2 章では、登場人物の観点から作品分析を行った。『魔女がいっぱい』の分析では、主人公のぼくは祖母に依存した価値観を持っており、彼の祖母は支援力が高く理想的に描かれる傾向にあったことを確認した。また、ブルーノは家族を表面的に捉えており、彼の親であるジェンキンズ夫妻は放任的な養育観を持っていると論じた。続いて『マチルダは小さな大天才』の分析では、両親を憎むも理想の親を求めるマチルダの複雑な現状や、自己中心的で表面的価値観を持つワームウッド夫妻、権威主義的かつ非常に暴君的なミス・トランチブル、そのトランチブルのいる家庭からの解放を望むミス・ハニーの様子を確認した。最後に、2 作品の登場人物の分析を踏まえて各家庭の関係性を比較した結果、強い情緒的つながりと対等な関係性が理想的に描かれている傾向にあるといえた。またこれら傾向並びに作中の登場人物やその関係性が、本稿の仮説における「愛情深さ」や「相手の尊重の姿勢」と一致していたことから、仮説の一部要素の妥当性を指摘した。

第 3 章では、2 作品を家族の機能面に着目して分析した後に、ダールの描く家族描写の意義を考察した。はじめに、ぼく一家は物語を通して安全保障機能が弱まる一方で家庭が精神的支援機能や協働的機能を担うこと、そしてジェンキンズ家は子供に満足感を与えていたが情緒的機能や教育機能に乏しく、物語終盤にて家庭の再構成が求められていたことを示

した。次に、ワームウッド家や旧ハニー家は教育機能や安全保障機能に乏しい状態が一貫していた一方で、新ハニー家はそれら 2 機能を回復し、さらに相互成長機能を備えていると分析した。最後に作中家族の機能を比較した結果、安全保障機能と教育機能を兼ね備えるべく一家と新ハニー家が理想的に描かれていることが明らかとなった。そしてこの安全保障機能と教育機能は本稿の仮説における「支援能力」や「安心感」、「頼りがい」の要素に当てはまり、かつ自伝での描写が上記要素を理想とした可能性を補強していたことから、作中描写がこれら 3 要素を裏付けることを指摘した。また、本論文全体の分析を踏まえると、ダールの描く家族は「様々な形の家族変化や各家庭の抱える困難を提示する点」や「変化を前提とした家族観を提示する点」に意義があるといえた。

本稿では、ダールの家族観を明らかにするために、彼の自伝分析から仮説を立てた上で、『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』の作中描写を分析してきた。結果、ダールは作中で強い情緒的つながりや高い対等性、安全保障機能、教育機能を理想的に描いている傾向があり、第 1 章で推察した安心感や頼りがい、支援能力、愛情深さ、相手の尊重といった要素と上記傾向が一致していることが確認できた。そして、『魔女がいっぱい』に登場する祖母の人物像が、母性愛を体現する点や子供の成長を後押しする存在として描かれている点でダールの母ソフィーに類似していたり、ダール家も安全保障機能や教育機能を兼ね備えていたと考えられたりしたことからも、作中描写とダールの経験に共通点があるといえた。そのため、ダールは安心感や頼りがい、支援能力、愛情、相手の尊重の姿勢を重要視しているという、本稿の仮説は妥当であるといえ、ダールは仮説のような家族観を持っていたと結論付けられる。また、彼の家族描写の意義については、第 3 章の考察より、ダール作品は多様な家族変化や、理想的家族・非理想的家族といった二項に収まりきらない段階的な家族像、そして再構成を前提とした家族観を描き出す点に意義があると結論付けた。

本論文では、ダールの自伝に加え『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』に登場する家族描写に着目し分析を行うことで、ダールの家族観と、彼の家族描写の意義を明らかにした。本稿の意義は、従来の研究ではあまり焦点が当てられてこなかった作家の「家族観」に注目し、『魔女がいっぱい』と『マチルダは小さな大天才』の家族を分析したこと、そしてその横断研究を行ったことで明らかとなったダールの家族描写の意義を示したことである。

参考文献

- Alston, Ann. "The Unlikely Family Romance in Roald Dahl's Children's Fiction." *Roald Dahl*, Ann Alston & Catherine Butler, editors, Palgrave Macmillan, 2012, pp.86-101.
- Bird, Anne Marie. "Women Behaving Badly: Dahl's Witches Meet the Women of the Eighties." *Children's Literature in Education*, Vol.29, No.3, 1998, pp. 119-129.
- Glynn, Paul. & Ian Youngs. "Roald Dahl: Rishi Sunak joins criticism of changes to author's books." BBC, 2023. Retrieved December 20, 2025, from, <https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-64702224>
- Sorhie, Kelevinuo. "THE VULNERABILITY BEHIND THE TERROR: AN ADLERIAN SKETCH OF AGATHA TRUNCHBULL FROM ROALD DAHL'S *MATILDA*." *ShodhGyan-NU: Journal of Literature and Culture Studies*, Vol.1, No.1, 2023, pp. 25-31.
- Suwastini, Ni Komang Arie., Ni Komang Julia Dewi., I Nyoman Pasek Hadi Saputra., & I Putu Ngurah Wage Myartawan. "A MOUSE'S COURAGE: THE CHARACTERIZATIONS OF THE BOY IN ROALD DAHL'S *THE WITCHES*." *Yavana Bhasha: Journal of English Language Education*, Vol.5, No.2, 2022, pp. 118-131.
- Treglown, Jeremy. *Roald Dahl: a biography*. Faber and Faber, 1994.
- 安藤聡「文学論としての『マティルダ』とその背景」『大妻比較文化:大妻女子大学比較文化学部紀要』18巻, 2017, pp.1-14.
- 泉順子「マチルダがめざす「高次欲求」—Roald Dahlの *Matilda* について—」『英語英文学研究所紀要』東北学院大学, 49巻, 2025, pp. 43-67.
- 井上洋子・古賀邦子・富永桂子・星乃治彦・松田昌子『ジェンダーの西洋史』法律文化社, 1998.
- 奥西洋子「ロアルド・ダール試論：表現と浄化」『相愛女子短期大学研究論集』42号, 1995, pp. 25-36.
- 川端有子『児童文学の教科書』玉川大学出版部, 2013.
- ショーター, エドワード『近代家族の形成』田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳, 昭和堂, 1987.
- 杉村使乃「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」『敬和学園大学研究紀要』15号, 2006, pp.167-187.
- ダール, ロアルド『単独飛行』永井淳訳, 早川書房, 2000.
- .『マチルダは小さな大天才』宮下嶺夫訳, 評論社, 2005.
- .『魔女がいっぱい』清水達也・鶴見敏訳, 評論社, 2006.
- .『少年』田口俊樹訳, 早川書房, 2022.
- 竹内敬子「イギリス 1802 年工場法とジェンダー」『成蹊大学文学部紀要』50号, 2015,

pp. 101-112.

富田泰子『ロアルド・ダール』KTC 中央出版, 2003.

灰島かり「『マチルダはちいさな大天才』—「子ども読者の支持」をどうとらえるか」『英米児童文学ガイド：作品と理論』日本イギリス児童文学会編, 研究社, 2001, pp. 146-154.

ミッテラウアー, ミヒャエル, ラインハルト・ジーダー『ヨーロッパ家族社会史：家父長制からパートナー関係へ』若尾祐司・若尾典子訳, 名古屋大学出版会, 1993.

宮崎駿「解説」『単独飛行』ロアルド・ダール, 永井淳訳, 早川書房, 2000, pp.269-275.

森川寿「ロアルド・ダールの「マチルダ」—真の家族を見つけるまで」『和歌山工業高等専門学校研究紀要』和歌山工業高等専門学校地域共同テクノセンター編, 33号, 1998, pp. 89-94.

弓削尚子『はじめての西洋ジェンダー史：家族史からグローバル・ヒストリーまで』山川出版社, 2021.